

特集

天文の世界と私

—プラネタリウムと再会して—

藤原晴美 (NPO法人ハーモニー・アイ、6月17日関東支部会トークゲスト)

1. プラネタリウムとの再会

2007年6月17日の山梨県立科学館のプラネタリウム。腰かけている椅子が、ここは傾斜型のドームらしいことを教えてくれます。

高橋真理子さんの解説の声に合わせて、私は膝の上で点字版の「星空解説 6月」のページを開きます。おおぐまのしっぽから春の大曲線をたどると、アルクトゥルスに出会います。この図には描かれていない“のし”のような形の星座、うしかい座が浮かんできます。

アルクトゥルスか…。「むぎぼし」という呼び方が好きだな…。そして子どもの頃、家の周りに広がっていた「麦秋」の風景も…。などと、私はよけいなことまで連想してしまいます。

かんむり座、ヘルクレス座、へびつかい座……。高橋さんが星座の探し方を解説しています。それを聞きながら点字の図をたどる私を、久しぶりに再会したプラネタリウムは、天文の入門書の星座の世界に連れ戻してくれました。

2. 最初の出会いは理科の教科書

私は緑内障のために強度の弱視だったのですが、25歳を過ぎた頃、正真正銘の全盲になりました。

天文にはたぶん子どもの頃——小学校に入学する前後——から興味をもっていました。近所の上級生に見せてもらった理科の教科書に出ていた、不思議な形の“ほうき星”を自分の目でも見たいと、毎晩のように空を見上げていたことを憶えています。「ほうき星」

がどんな星なのか、めったに見える星ではないことなど、まったく知らなかったのですが。

その頃の郷里の夜空はとても暗くて、私にも天の川やたくさんの星が見えていました。

3. 天体望遠鏡と天体写真

私は裸眼で月の満ち欠けを見たことはありません。本の写真や絵で三日月や半月は知っていましたが、0.03という私の視力では、月は日毎に明るさが変わる“円盤”に見えました。

高校生のとき、欲しかったニュートン式の反射望遠鏡をようやく手に入れることができました。目指す天体を接眼鏡の視野に入れるのに苦労しましたが、自分の目でも三日月や半月が見えたときは感激しました。明暗境界線付近の大きなクレターの陰まで見えたのです。

自作の望遠鏡で金星が満ち欠けするのを発見したときのガリレイのイメージと重なって、とても嬉しかったです。

望遠鏡は強度弱視だった私の強い見方でした。でも私に見える天体は限られていました。それを補ってくれたのが、天文の本に掲載されている天体写真や詳細なスケッチでした。火星食や土星食は、私の目では絶対に無理な天文ショーです。それらも月刊誌『天文ガイド』の写真でしっかりと見せてもらいました。

4. テレビで見た日食

テレビも忘れることができません。

1963年7月に北海道で見られた皆既日食を、NHKが現地からテレビ中継したのでし

た。私は早起きをして、家のテレビでしっかりとそれを見ました。番組で解説を担当していたのが村山貞男先生でした。

ブラウン管の中で次第に細くなっていく太陽、月によってすっかり隠された太陽、その周りにぼんやりと広がる淡いコロナ、白く見えるプロミネンス（白黒映像でした）、食の終わりを告げるダイヤモンドリング、その映像は今も忘れていません。

そのときの記憶が鮮明に残っていたからこそ、1987年9月の沖縄金環日食や、1997年3月の部分日食（東京での食分63%）を、私は視覚無しでも、身体全体をセンサーにすることで体験することができたのだと思っています。

5. たくさん見ましょう

私は自分の経験から、弱視や全盲の人に次のように呼びかけることにしています。

あらゆる機会を捕らえて星を見てください。空や雲を見てください。動物を見てください。植物を見てください。地形や石を見てください。

自分の目に自信がなかったら、望遠鏡や双眼鏡、顕微鏡を使ってください。写真を見てください。スケッチを見てください。テレビやビデオ教材、インターネットで配信される画像も利用してください。

プラネタリウムや博物館に足を運んでください。自然観察会に、星の観望会に積極的に参加してください。そして、そのときの感動をしっかりと記憶に焼き付けてください。

プラネタリウムで星空の説明を聞くときにも、博物館の展示ケースの中の資料の前に立ったときにも、美術館で絵の前に立ったときにも、その経験はきっと役に立つと思います。私のように、いつか視力を無くすことになったとしてもです。

編集部より

前号では『更正』と『更生』の表現が混在していましたが、『更正』は『更生』に訂正します。